

ライフサイクルとコロナ禍

神藤 貴昭(本学教職研究科教授 教育心理学)

2020年度が終わろうとしています。本年度は新型コロナウイルス禍で、医療現場はもちろん、教育現場・福祉現場が多大な影響を受けました。また、観光業や飲食業、航空・鉄道関係などをはじめ様々な業種が、経済的な打撃を受け、様々な企画が中止になりました。おそらく日本(世界)のすべての人たちが何らかの形で影響を受けていると思われます。

コロナ禍のように、大きなライフイベント(しかも持続性がある)を多数で同時に体験する場合は、自分や身のまわりの家族を大事にし、おかれた状況に向き合うことだけではなく、「思いもよらない他者」の体験や状況に考えをめぐらせることも重要でしょう。例えば、自分とは異なった職種の人、自分とは異なった職務上の責任をもつ人、自分は体験してこなかった病気を持っている人について。さらには価値観(自粛について、自由について、科学的エビデンスの見方も…)の違いについても考えをめぐらすことが大事になるでしょう。

また、自分とは異なる世代の人たちも「思いもよらない他者」だといえるかもしれません。コロナ禍を人生のどの時期に体験するかによって、その意味付け方や影響のされ方が異なってくるように思われます。ここでは、ライフサイクルという観点から、今回のコロナ禍を考えてみます。ライフサイクルとは、誰もが通る人生の周期のことです。一般的には、乳幼児期、児童期、青年期、成人期、老年期などと分類されることが多いです。

乳幼児期は、親など特定の大人との愛着形成が重要になる時期であるとされます。コロナ禍での大人の不安や緊張、苛立ちに、何らかの影響を受けるかもしれません。また、マスクをつけていると表情や声色がわかりにくく、大人に対する不安も大きくなるでしょう。

児童期は、仲間との遊びに没頭する時期であり、また勉学やスポーツに自信を得る時期ですが、コロナ禍では、思うように遊べず、学べないかもしれません。

青年期は、自己を確立し進路を決める時期となります。しかし、コロナ禍では、これまでと同じような授業参

加がままならず、受験や大学教育への不安も出てきます。就職状況も悪化し、希望する業種がコロナ禍の直撃を受けていることもあるでしょう。海外で学ぶ夢も中断されることとなります。

成人期は、経済的にもある程度充実し、職務に邁進したり、家庭を持ったり、後進を育てたりする時期と言えます。しかし、コロナ禍で、経済的・精神的に疲弊し、仕事の仕方も大きく変更を余儀なくされています。

老年期は、人生の総決算であり、また高齢化社会においては、第2の人生の始まりともいえるでしょう。しかし、コロナ禍では、これまでの労働でなんとか得たいくぶんかの時間的・経済的ゆとりを使うこともできません。感染による重症化のリスクも大きくなります。

もちろん、以上のように、各段階を簡単にまとめることなどできないでしょう。人それぞれの課題や悩みがあるし、環境も異なります。しかし、ある程度は以上のようなことが言えるのではないのでしょうか。

学校や職場、家庭、地域では、いろいろな世代が混ざって暮らしています。お互いに共感することは難しい面もあるでしょう。しかし、自分を大事にしつつも、自分とは異なる世代に思いをはせることは重要だと思われまます。自分とは離れたライフサイクルを生きる他者は、今どのような課題や悩みをかかえているか。時には自分と意見が合わず、共感できず、葛藤することもあるでしょうが、少しだけでも、思いをはせることはできます。

心理学者のエリクソン(Erikson, E.H.)は、とくに、成人期において、次世代に関心を持ち、次世代を育てるということが発達課題となると考え、このような心性を「ジェネラティビティ」と呼びました。さらに、成人期に限らず、人間には、異世代との相互的にかかわりへの意志があると言われています。コロナ禍においてこそ、このような人間が本能的に持つ、異世代との相互的にかかわりの力を発揮することができないのでしょうか。